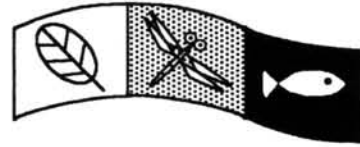


Rio



リオ ～豊田市矢作川研究所 月報～ No. 9・10



児ノ口公園 (豊田市久保町)

～ 特集・児ノ口公園 ～

鎮守の森 児ノ口公園

長谷川 安治

元の児ノ口公園は、昭和37年頃より市が田畑を買収し、青少年公園として工事を始め、野球場、少年用プール、幼児遊戯場を作って41年頃完成しました(面積1.9ha 5700坪)。現在の公園に改造されたのが平成6年からで、7年に完成しました。今までの野球場、プール、幼児の遊び場を無くし、五六川も以前は暗渠式で公園内地下を横切って流れていましたのを、公園内の北方より南方に流れる小川に造りかえられました。今では魚やエビ、カニがすみつくようになりました。五六川は矢作川より水が取り入れられて、昔の五六川に戻りました。野球場の有ったところに小山(里山)ができて平成8年に色々な苗木が植えられました。2年後の現在は2mから、成育の良い木は5m以上に育ちました。鳥も四季折々にアオバズク、アオサギ、

カワセミ、フクロウ、ハヤブサ、キジバト、モズが飛来しています。昨年の6月頃アオバズクの番いが来て古木の上のほうに巣を造り、4羽の雛がかえりました。親鳥が夜間餌を与え、8月頃親子6羽で何処かへ飛び立っていきました。愛鳥家達がカメラを持って日中より夜中まで観察してみえます。アオバズクは今年も子育てに来るでしょう。毎年来ますから楽しみにしております。

何百年も前、堤防が無かった頃の矢作川は、平戸橋の方より西に流れ、平芝町の霊岩寺の山岩に当たり、南に方向を変えて児ノ口公園に流れていたと聞いています。公園中央の西側に児ノ口神社があり、横の道が其の頃の矢作川の堤防でした。桜の木がたくさん植えてあり、戦前まで桜堤防として旧挙母町の名所でした。

児ノ口公園の名のもとになった児ノ口神社の由緒を述べておきます。第11代垂仁天皇第12皇子が西三河地方を統治されていまして（皇子の名は不明）。当地を巡回中に当所にて薨去され、お供の二人も殉死致されて此の場所に葬られました。今も古墳が残っています。昭和の初め頃、剣、勾玉が出土した事があり、児ノ口神社の社神、衣君落玉命としてお祭りしております。

又この頃、公園より南（旧拳母町）では矢作川の洪水のたびに家が流され、被害が大きく、元城

町の桜城（旧拳母城）も築城半ばで童子山に移転されて拳母城が出来ました。

都市の中央に自然の山川のある公園は珍しいのか、全国より多くの方が視察に来られます。現在の鎮守の森 児ノ口公園が出来た平成8年6月より市から委託を受けて、地元区民、商店街、老人クラブで50名ほどの会を作りました。公園内の清掃工、立木枝打工、川の清掃工と皆さん楽しく作業をしております。

（はせがわ やすじ、児ノ口公園管理協会 会長）

児ノ口公園が投げかけた問題

回廊（コリドー）の在り方に深い論議を！



田中 蕃

豊田市の都心部に、平成7年に完成した「児ノ口公園」がある。試行錯誤的ではあったが、その造成は、市の環境行政の上で画期的な英断であったと私は思っている。

もともとこの名での公園が同じ場所に存在していたので、全面改造ともいえる造成の中身を知らない人には、いまさら何を…という程度のことかもしれない。しかし市営プールやグラウンドなどのスポーツ施設がある場所としてのイメージを持つ市民には、自然公園として再生した今の姿は信じられないだろう。

完成後わずか3年で、そこはかたなく草いきれの漂う、緑に包まれた休息の場が都心に現われた。

暗渠となって35年近く地中にあった五六川の地表への復活は、“小鮒釣りしかの川”の童心をいやが上にも駆り立てる。「小川の流れとは、こんなにいいものなのか…」。都心にあればあるほど、物資枯渇の頃にひもじさも忘れて遊んだ、少し近くの郊外のおいを、郷愁にのせて感じとれるのである。

この公園の自然を高めるのは、もともとあった涸れ池に満々と水をたたえた姿である。キシヨウブやガマが水辺に立ちならび、スイレンが池面をおおうので、水の中でゆうゆうと泳いでいるであろう魚の存在を直接目で見ることは難しいが、そうした植物の揺れ具合で察知できる。水中の生物の生きざまを草のそよぎで想像する作業は、未知の世界に憧れた少年の特権をとりもどした気分である。

在りし日の姿のみにとらわれず、この公園に新

たに企画されたのは、里山の雑木林を、市街地に出現させようとしたことである。そんな突拍子もないことなんて…、自然復元は必要だが何もそこまで…と、企画段階で聞かされたときは正直驚いた。でも、都市の中につくる公園としてどんな姿が理想的なのだろうと考えたとき、私はつくられたものに対して批判はできるが設計者になれないもどかしさを感じた。ともかくやってみてのことだと思ったときから、陰ながら私はこの企画実現を後押しすることに決めた。近辺の里山にある樹種を、山取りの幼木か種子発芽させた苗木で賄うことで雑木林づくりが始まった。植えた段階で樹齢2～3年程度の苗であったから、まだ7～8年目にしかならないはずで、在るべき雑木林の姿にはほど遠い。グラウンドに小山のように盛り土した所に植えたこともあって、地中水分の供給が十分ではないような気がしないでもない。しかし成長した日の姿をイメージしながら、楽しみな日々である。

さて、私の楽しみは、この公園にどのような形で本当の自然らしさが蘇るのかを調べることである。企画を知ったときから、私は最も得意とする蝶類の種の変化を追跡することで、公園づくりの評価をしようと行動を開始した。といっても、四六時中これに関わっているわけにはいかない。月に一度、公園の中や周辺をゆっくり歩いて、観察できた蝶の種とその数（単に多いか少ないかのチェックのみ）を記録した。小さな公園なので1回の観察はすべて1時間内で終わる。蝶の成虫の活動期

である4～11月、計8回で1年間の観察完了。小さな仕事にすぎないが、何か分かるかもしれない淡い期待があった。

工事中は避けたが、着工1年前と完工後2年半のデータを取った。着工前8回、完工後21回である。

観察結果をまとめてみると、着工前15種だったのが、完工後の2年半で31種になった。観察回数が造成前後で相当違うので増えて当然とも思われるが、この増え方は明らかに自然公園をつくったことによる増加と考えられることが多い。それは観察される種の中身の問題で、これまで市街地では見られなかったものが定着するようになった事実は、やはり無視できない。だから端的には、公園造成は明らかに成功だったとの結論になる。

けれども視点を変えてみると、成功は道半ばの程度である。それはどこからどんな蝶をこの公園に導き入れるかという見方である。公園を中心に半径1kmと3kmの範囲を、何も根拠があるわけではないが、羽があって飛行能力を持つ蝶がなんとか辿りつけそうな平均的距離と想定しての供給源生息地であるとした。1km圏は確認種数45。3km圏では63である。児ノ口公園造成後の現在までの確認種数31は、まだはるかに及ばない数である。公園内の雑木林はまだまだ完成にほど遠いから、丘陵地に近い雑木林の蝶の生息環境は整っていない。けれどもそれらの種は、雑木林を大きくはみ出して移動する習性がない。たとえ児ノ口公園の雑木林がそれらしい姿になっても、そう簡単には丘陵地の蝶は入ってこないだろう。

そう思わせる傍証は、児ノ口公園完成1年後につくられた「お釣土場水辺公園」で同様な蝶類調査を行っているうちに、次第に明らかになってきた。お釣土場水辺公園はほとんどがマダケの密林であったが、ここは最初から川辺の緑に覆いつくされていた。その緑を、マダケの比率を極端に減少させる姿に変えた。児ノ口公園とは逆方向からの生物生息環境づくりだった。ここでも蝶の観測種数は確実に増えたが、同じ1km、3km圏において、より丘陵地に近いのに、同じように丘陵地の雑木林生息種が欠落していた。川辺の緑の中の植物多様性が乏しい結果である。つきつめれば、コナラ、アベマキなどブナ科のドングリのなる樹木とそれを主要構成種とする植生がないのである。

都市の中に孤島のように自然公園をつくっても、

そこで動物と人が遭遇できる空間をつくりあげるには、動物の多い場所からの移動の道筋が確保されねばならない。それを環境生物学ではコリドー（回廊）と称して重視している。矢作川の川筋の緑は環境基本軸として認識されている。そしてそこから都市への自然のつながりをもたせる計画が、市の環境基本計画の目玉となっている。大きなコリドーと考えているのだ。けれども共通概念的な矢作川環境基本軸は、実は質的内容において問題点が多い。

どんな姿のコリドーをつくるべきか。児ノ口公園型の雑木林は、完成すれば理想的な姿かも知れぬ。ならば、そこで生息できる生物種の導入が可能なコリドーを、緑地整備の度ごとに計画施工して行かねばならない。そういうコリドーを市内に網の目のように張り巡らせれば、市の目指しているのどかさとうるおいのある街づくりへ、一挙に近づくことになるだろう。環境行政は観念論だけでは成り立たない。実効性を示す必要がある。公園をつくっても、そのモニタリング計画が伴わねば、つくりっぱなしである。

因みに児ノ口公園に飛んでくる蝶を何度か目撃したが、街路樹づたいに侵入する個体は皆無であった。皮肉にも、多くは民家の庭から道路を横切る形で公園に辿りつく。街路樹は、景観的な自然の切り取り模型で、コリドーとしては役立たない。家庭における小規模な樹木の植栽のほうが、小さなパッチの連続性として効果を現わしている。本格的コリドーの実現が困難な段階では、植栽推奨樹種などを明確にして、次善の手段として各戸に協力を依頼するのが現実的のように思われる。

（たなか ばん、豊田市矢作川研究所 主任研究員）



児ノ口公園内の五六川と水田



ダム直下流の悲惨

新見 幾男

ここで言う「ダム直下流の悲惨」というのは、アユの釣り人だけが知っている「川底の異変」を指すのだが、それは河川・ダム管理の永年の誤りがつもりにつもって起きた異変であり、解決には河川管理の思想を考え直す必要があるように思う。そのことを矢作川^{やっせ}古鼠水辺公園を例に考えてみたい。

古鼠水辺公園のある豊田市の「扶桑町^{かそうちょう}」は、近年まで「古鼠」と呼ばれた。文字がむつかしいので、「古鼠」の慣用字を当てた。それでも文字の意味はフルネズミだから、それが嫌になって、市の新町名設定の際に今の扶桑町に改められた。

しかし、時がたつにつれ集落の人々は、古い地名を失ったことを寂しく思うようになった。それで、矢作川に近自然公園が出来て、命名を求められた時、「古鼠水辺公園」の名を思いついたのである。誰も真似のできない、風格のある名称だと思う。

古鼠は昔から農地が少ないから、目の前の矢作川で生きる人が多かった。筏乗りをたくさん輩出した。竹材業の従事者が多かった。アユの職漁師もいた。矢作川を愛する気風は、今も強い。

矢作川の古鼠前の瀬は、越戸ダムの直下流にある。このダムは中部電力の中規模ダムで、昭和四年に完成した。矢作川は有名な砂吐き川だから、ダム湖はいつも半ば砂で埋まっていた。その砂は、洪水ゲートを開けるたびに、ダム下流へ排出された。発電水路経由でも、ダムの堆砂は下流へ流れ出た。ダムの建設以降も、ダム直下流の矢作川、つまり古鼠の前の矢作川には流砂が豊富にあって、川底は柔軟な構造だった。洪水のたびに川底が動き、^{みおすじ}滞筋はいつも変わっていた。

事情が変わったのは、昭和三十年代以降である。コンクリートの骨材として、ダム湖内の砂利がサンドポンプ船で採集されはじめた。ダム湖がコンクリート消費地に近いため、砂利採集は徹底的に行われた。昭和四十六年に矢作ダムが完成し、上流から越戸ダムに流入する砂の量が大きく減った。

昭和五十年代に入る頃には、越戸ダム湖の堆砂は消えていた。直下流の平戸橋や古鼠の矢作川で

も、川底から砂が消え、河床が何メートルも低下した。川底が固くなった。最初にアユ釣り船の船頭が「川底に船竿がささらなくなった」と言って、川底の異変を表現した。

その頃から、アオミドロ、カワシオグサなどの大型藻類が異常発生し、川底の石をおおうようになった。アユのエサ場が奪われた。次第にアユが棲みつかなくなって来た。そういう状態がもう二十年近くも続いている。

この間の平成三～五年に、古鼠水辺公園造成の近自然工事が行われ、その際に大型機械で川底の天地がえしが徹底的に行われた。その春、古鼠の人々はウグイが大量産卵する姿を、久しぶりに見た。しかし、天地がえしで川底に出てきた砂は数ヶ月で流れ去って、もとの固い川底に戻ってしまった。

昨年（平成十年）春、約三百万尾の天然アユが明治用水頭首工を超え、遡上して来た。そのうち約五十万尾が越戸ダムの魚道を超えたのが、確認された。アユは古鼠を通過しただけで、ついに居着いてくれなかった。

古鼠の人々には、ショックな経験だった。もう一度川底の天地がえしをやることになった。その施工協議が、この一月にあった。

結局、工事は一時中止になった。平成三～五年の大規模工事の経過からすれば、工事の効果は一年と続かない。工事を延期して、この年間に「古鼠を徹底研究しよう」ということになった。漁協本部もその支部方針を承認し、本部から関係機関に協力を呼びかけることになった。

古鼠の河川環境の悲惨な状況は、矢作川だけではなく、全国の河川の“ダム直下流区域”の明日の姿だと思う。古い被害地である古鼠の研究成果は、これから全国のダム河川で活用してもらえと思う。

前に述べたように、地元の古鼠は矢作川を愛する気風が強い。だから古鼠研究に深い関心をもって、研究に協力してくれる。矢作川研究所の専任研究員、共同研究員の皆さんに古鼠研究へのご参加をお願いしたい。

さて、河川管理のあり方についてであるが、私はこういうことが気になっている。

矢作川の河川管理者は、建設省・愛知県であるが、現場での実権は利水団体が握っていると思う。農業用水、工業用水、上水道用水、発電用水の関係団体が実権をもって河川の日常管理をしているのだが、この団体の人々に関心があるのは、主として“水量”だけではないか。関心の及ぶ範囲は、せいぜいBOD（生物化学的酸素要求量）やCOD（化学的酸素要求量）等で表現できるところまでではないか。

別の言い方をすれば、利水団体にとっては、まあまあの水質の“水量”があれば、それで良かったのではないか。川自体がどう流れているかに無関心で、必要な水量が流れて来れば、それで良かったのではないか。そういう河川管理の思想で、矢作川は戦後五十年も管理されてきたように思わ

れる。

その五十年につもったアカが“ダム直下流の悲惨”の正体であろうが、そのアカの正体について、これから分析的に考えて見なければならぬ。それが、“古巣研究”の中味だと思う。

「山里の釣りから」という名著に触発されて、私たちは矢作川の“河川管理の思想”を練り直さなければならない、と思うようになった。著者の内山節氏が言う通り、河川を“水量確保”の思想だけで管理している限り、矢作川環境は今後も悪化の一途をたどるように思う。川はどう流れるべきか、という“流れの思想”が欠落していたことは、内山氏の指摘の通りである。

古巣研究が矢作川管理の思想を練り直すきっかけになることを、私は願っている。

（にいみ いくお、矢作川漁業共同組合

専務理事・豊田市矢作川研究所 事務局長）



古巣水辺公園 — 春・ヤナギ林の芽吹き



古巣水辺公園 — 夏・アユ釣り調査

